

# 人生でやりたいことの有無と個人属性および主観的幸福度との関係

～人生でやりたいことがあるのは、当たり前なのか～

## Relationship between Existence of Life Work and Personal Attributes, Subjective Well-being - Is it Naturally to Exist Life Work? -

宗 健 大東建託株式会社 AI-DXラボ所長  
SO Takeshi Manager, AI-DX Laboratory, Daito Trust Construction CO.,Ltd.

要旨:本研究では、全国の約 18 万人を対象とした大規模なアンケートデータを用いて分析を行い、人生でやりたいことがあるのは 24.5%に過ぎず、年齢・性別・家族形態による差は小さく、リベラルな考え方をする年収 1000 万円以上の経営者といった特定の属性でやりたいことがある比率が高まることが分かった。また、主観的幸福度に対して、既婚、世帯年収、世帯金融資産、家族関係、仕事の状況といった項目に比べてやりたいことの有無の影響は比較的小さいことが分かった。こうした結果から、やりたいことがあることが当然であるといった学生指導や組織マネジメントは適切ではない可能性が示唆された。  
キーワード:やりたいこと、個人属性、主観的幸福度、マネジメント

**Abstract:** The analysis was conducted using questionnaire data for approximately 180,000 people in Japan. The ratio of those who have a life work is 24.5%. The effect of age, gender, and family type on the existence of life work is small. People with a liberal way of thinking and managers with an annual income of 10 million yen or more are more likely to have a life work. In addition, the effect of existence of life work on subjective happiness is relatively small compared to items such as marital status, annual household income, household financial assets, family relationships, and work status. These results suggested the possibility that student guidance and organizational management that assumes existence of life work is not appropriate.

### 1. 研究の背景および目的

近年は起業して成功した経営者などが、学歴は不要だ、やりたいことをすぐにやるべきだ、といった主張をする場合もあり、やりたいことがない、という状態はむしろ忌避すべきものだという雰囲気すらある。

そうしたいわゆる自分探しが社会に広がり始めたのは、バブル崩壊以降のようだが<sup>注 1)</sup>、やりたいことがあることが当たり前なのか、それが近年注目されている主観的幸福度<sup>注 2)</sup>にどの程度の影響があるか、といったことは必ずしも自明ではない。

本研究では、そもそも世の中全体で、やりたいことがあるかどうかを定量的に把握し、それが個人属性によってどのように異なるのか、主観的幸福度とはどのように関係しているのかを明らかにすることを目的としている。そうしたことが明らかになれば、大学での学生指導や、企業での組織マネジメント、中高年のキャリア開発等に生かせると考えられるからである。

### 2. 先行研究のレビュー

やりたいことがあるかどうかについて、リクルート(2021)では転職時の重視項目の 1 位として 56.3%が「やりたいことを仕事にできる」と回答し、リクルート進学総研(2019)では高校生の 92%が「夢をもつことは大切」、75%が「自分の夢を見つけて実現していくのが良い生き方」と回答しており、やりたいことがあることが当たり前であるという認識が広がっているようだ。

やりたいこととキャリア形成に関する研究では例えば大学生を対象とした石橋ら(2019)といったものがある。

主観的幸福度の研究では、大竹ら(2010)が様々な角度から分析を行っており、宗・新井(2018)では、層別化した分析が行われている。

しかし、やりたいことがあるかどうかの大規模な調査は行われておらず、個人属性、主観的幸福度との関係も明らかではない。

### 3. 研究の方法

研究は、住みこころランキング調査<sup>注 3)</sup>に含まれるやりたいことの有無や個人属性、就労状況、主観的幸福度に関するアンケートデータを用いて分析を行う。

アンケート調査は、配布・回収を株式会社マクロミルに委託して 2022 年 3 月 8 日から同 29 日に行った。回答者属性の記述統計量は、表 1 の通りである。

表 1 回答者属性の記述統計量

属性	区分	構成比
性別	男性	44.8%
	女性	55.2%
未既婚	未婚	38.9%
	既婚	61.1%
子ども	有り	42.2%
	無し	57.8%
孫	有り	9.9%
	無し	90.1%
年代	20歳代	16.7%
	30歳代	23.6%
	40歳代	24.6%
	50歳代	22.4%
	60歳代	12.7%
学歴	大卒以上	41.7%
	大卒未満	58.3%
住居	持家	48.2%
	持家以外	51.8%
リベラル		11.9%
やりたいことがある		24.5%
回答者数		177,043

	平均	標準偏差	最小	最大
主観的幸福度	6.51	2.11	1	10
年齢	43.6	12.7	20	69
世帯年収	562	456	0	9,999
世帯金融資産	934	2,765	0	99,999
地域満足度	0.52	0.89	-2	2
建物満足度	0.55	0.91	-2	2
仕事を優先する	-0.49	1.09	-2	2
未来は明るい	-0.13	1.10	-2	2
家族関係は良好だ	0.66	1.09	-2	2
仕事は順調だ	0.08	1.07	-2	2

### 4. 分析結果

#### (1) 記述統計分析

表 1 の記述統計量を見ると、「今現在、人生でやりたいことがある」という設問に yes と回答したのは、24.5%に過ぎず、やりたいことがあるのが当たり前ではないこ

と分かる。

表2は「人生でやりたいことがある」の有無を目的変数としたロジスティック回帰分析の結果であるが、各説明変数毎のやりたいことがある比率を見ても、最も比率が高いのは「リベラルダミー」<sup>注4)</sup>の43.2%で、性別、年代等による差は小さく、年収1000万円以上でも29.2%と全体平均の24.5%と大きな違いはない。

また、ロジスティック回帰分析結果のオッズ比を参考に、個別の条件に該当する場合の該当人数と、やりたいことがある比率、主観的幸福度を集計したものが表3である。

やりたいことがある比率は、条件を指定しない場合は24.5%に過ぎず、すべての条件でnoの場合は5.0%と極端に低くなる。

それが、友達がありSNSを使っていれば、26.1%と全体平均に近くなり、そこに年収1000万円以上が加わると、29.1%、性格が前向きが加わると37.5%、60歳以上が加わると46.2%、リベラルが加わると62.7%と上昇していき、経営者であるが加わり全項目を満たす場合は、90.0%と極めて高い比率になる。

そして、主観的幸福度を見ても、やりたいことがある比率と同様の傾向があり、条件を指定しない場合の主

観的幸福度は10点満点の6.51で、すべての条件でnoの場合は5.64とかなり低くなる。

それが、友達がありSNSを使っていれば、6.39と全体平均に近くなり、そこに年収1000万円以上が加わると7.03、性格が前向きが加わると7.94、60歳以上が加わると8.08と上昇し、リベラルが加わると7.98とやや下がり、経営者であるが加わり全項目を満たす場合は、8.20と極めて高い水準になる。

そして、やりたいことの有無でそれぞれの条件で主観的幸福度を集計してみると若干の差がある。

(2) やりたいことに対するロジスティック分析

表2のオッズ比を見ると、年齢が高まるとオッズ比も高まる傾向にあり、「友達がいるダミー」「SNS利用しているダミー」は2を超え、「性格前向きダミー」1.8、「リベラルダミー」1.55などとなっている。

ここまでの結果を見ると、前向きな性格でリベラルな考え方をもち、年収が高く、社会的にも成功しているような、いわゆるキラキラした人たちにとっては、やりたいことがあるのが当たり前で、そうした人々がメディア等で悪意無く、無邪気に「やりたいことはきっと見つかる」「やりたいことをすぐにやろう」といっている姿が想像される。

表2 「人生でやりたいことがある」を目的変数としたロジスティック回帰分析の結果

目的変数=人生でやりたいことがある(yes=1/No=0)					
説明変数		人数	比率	やりたいことがある比率	オッズ比 p値
性別	男性	79,391	44.8%	24.1%	baseline
	女性	97,652	55.2%	24.8%	0.94 ***
婚姻	未婚	68,930	38.9%	24.6%	baseline
	既婚	108,113	61.1%	24.4%	0.91 ***
子ども	なし	102,375	57.8%	24.8%	baseline
	有り	74,668	42.2%	24.0%	0.92 ***
年齢	20歳代	29,498	16.7%	24.6%	baseline
	30歳代	41,776	23.6%	24.1%	1.05 ***
	40歳代	43,557	24.6%	22.9%	1.06 ***
	50歳代	39,739	22.4%	24.8%	1.19 ***
	60歳台	22,473	12.7%	27.5%	1.35 ***
世帯年収1000万円以上ダミー		18,127	10.2%	29.2%	1.17 ***
友達がいるダミー		118,633	67.0%	30.6%	2.35 ***
SNS利用しているダミー		127,432	72.0%	29.4%	2.22 ***
性格前向きダミー		51,131	28.9%	31.1%	1.80 ***
リベラルダミー		21,126	11.9%	43.2%	1.55 ***
職業	自営業ダミー	9,109	5.1%	34.4%	1.61 ***
	会社経営者ダミー	3,758	2.1%	29.2%	1.21 ***
定数項					0.07 ***

表3 条件毎の人数とやりたいことがある比率および主観的幸福度

抽出条件と人数・構成比・やりたいことがある比率										主観的幸福度			
友達 いる	SN S利 用	年収 10 00 万以 上	性格 が前 向き	60 歳以 上	リベ ラル	経営 者	該当人数	総数比	やりたい こと がある 比率	全体	やりたい こと 有り	やりたい こと 無し	差
—	—	—	—	—	—	—	177,043	100.00%	24.5%	6.51	6.86	6.40	0.46
×	×	×	×	×	×	×	17,027	9.62%	5.0%	5.64	5.62	5.64	-0.02
○	×	×	×	×	×	×	7,194	4.06%	16.3%	6.17	6.38	6.14	0.24
○	○	×	×	×	×	×	43,829	24.76%	26.1%	6.39	6.60	6.31	0.29
○	○	×	○	×	×	×	20,197	11.41%	35.4%	7.60	7.68	7.56	0.12
○	○	×	×	×	○	×	8,008	4.52%	36.1%	5.83	6.01	5.72	0.29
○	○	○	×	×	×	×	4,910	2.77%	29.1%	7.03	7.20	6.96	0.23
○	○	○	○	×	×	×	3,454	1.95%	37.5%	7.94	8.10	7.84	0.25
○	○	×	○	×	○	×	3,071	1.73%	50.3%	7.24	7.30	7.19	0.11
○	○	○	○	○	×	×	325	0.18%	46.2%	8.08	8.13	8.03	0.10
○	○	○	○	○	○	×	51	0.03%	62.7%	7.98	8.22	7.58	0.64
○	○	○	○	×	○	○	22	0.01%	72.7%	8.23	8.13	8.50	-0.38
○	○	○	○	○	○	○	10	0.01%	90.0%	8.20	8.44	6.00	2.44

表 4 主観的幸福度を目的変数とした重回帰分析の結果

モデル		全体	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代
主観的幸福度		6.51	6.66	6.62	6.33	6.33	6.79
平均		2.11	2.08	2.11	2.17	2.13	1.87
標準偏差							
サンプルサイズ		177,043	29,498	41,776	43,557	39,739	22,473
自由度修正済み決定係数		0.433	0.360	0.447	0.452	0.449	0.427
説明変数		偏回帰係数					
年齢ダミー	20歳代	baseline					
	30歳代	-0.22 ***					
	40歳代	-0.31 ***					
	50歳代	-0.27 ***					
	60歳代	-0.08 ***					
性別ダミー	男性	baseline					
	女性	0.21 ***	0.09 ***	0.20 ***	0.26 ***	0.24 ***	0.19 ***
未既婚ダミー	未婚(結婚経験無し)	baseline					
	未婚(離婚経験あり)	0.12 ***	-0.04	0.09 **	0.15 ***	0.06 *	0.15 ***
	未婚(死別経験あり)	0.23 ***	0.39 ***	0.57 ***	0.27 ***	0.14 **	0.05
	未婚(同棲している)	0.46 ***	0.40 ***	0.55 ***	0.55 ***	0.29 **	0.76 ***
	既婚(離婚・死別の経験はない)	0.63 ***	0.56 ***	0.68 ***	0.59 ***	0.59 ***	0.53 ***
	既婚(離婚後、再婚した)	0.65 ***	0.17	0.72 ***	0.66 ***	0.58 ***	0.57 ***
	既婚(死別後、再婚)	-0.54 ***	-1.68 ***	-1.36 ***	-0.27 *	0.02	0.39 ***
子供有無ダミー	子ども無し	baseline					
	子どもあり	0.08 ***	0.25 ***	0.18 ***	0.11 ***	-0.01	-0.07 ***
孫有無ダミー	孫無し	baseline					
	孫あり	0.15 ***	-0.06	0.17 ***	0.09 **	0.19 ***	0.15 ***
世帯年収ダミー	世帯年収ゼロ	baseline					
	世帯年収1-199万	-0.13 ***	0.01	-0.12 ***	-0.17 ***	-0.22 ***	-0.18 ***
	世帯年収200-399万	-0.12 ***	-0.09 ***	-0.08 ***	-0.20 ***	-0.17 ***	-0.12 ***
	世帯年収400-599万	-0.02 *	0.06 *	0.05 *	-0.08 ***	-0.11 ***	-0.03
	世帯年収600-799万	0.03 *	0.02	0.09 ***	0.03	-0.03	0.01
	世帯年収800-999万	0.07 ***	0.20 ***	0.08 **	0.05	0.03	0.03
	世帯年収1000-1199万	0.10 ***	0.15 **	0.17 ***	0.08 *	0.09 **	-0.02
	世帯年収1200-1499万	0.11 ***	0.19 **	0.13 **	0.08 *	0.12 ***	0.00
	世帯年収1500-1999万	0.17 ***	0.34 ***	0.19 **	0.14 **	0.16 ***	0.08
	世帯年収2000-4999万	0.28 ***	0.39 ***	0.46 ***	0.18 *	0.26 ***	0.20 **
	世帯年収5000万以上	0.33 ***	0.77 **	0.63 **	-0.16	-0.14	0.92 ***
世帯金融資産ダミー	世帯金融資産ゼロ	baseline					
	世帯金融資産1-199万	0.04 ***	0.02	0.03	0.08 ***	0.06 **	-0.07 **
	世帯金融資産200-599万	0.11 ***	0.11 ***	0.09 ***	0.13 ***	0.14 ***	0.02
	世帯金融資産600-1199万	0.14 ***	0.01	0.16 ***	0.18 ***	0.13 ***	0.06
	世帯金融資産1200-1999万	0.17 ***	0.05	0.16 ***	0.14 ***	0.20 ***	0.13 ***
	世帯金融資産2000-4999万	0.18 ***	0.09	0.12 ***	0.16 ***	0.16 ***	0.20 ***
	世帯金融資産5000万以上	0.20 ***	0.41 ***	0.06	0.16 ***	0.20 ***	0.20 ***
住居所有形態ダミー	持家以外(賃貸・公営等)	baseline					
	持家	0.10 ***	0.06 ***	0.06 ***	0.09 ***	0.09 ***	0.20 ***
学歴ダミー	中卒	baseline					
	博士	0.42 ***	0.61 ***	0.53 ***	0.37 ***	0.32 ***	0.10
	修士	0.35 ***	0.48 ***	0.44 ***	0.37 ***	0.27 ***	0.08
	学士	0.28 ***	0.43 ***	0.36 ***	0.23 ***	0.20 ***	0.08
	短大・高専・専門学校	0.24 ***	0.32 ***	0.35 ***	0.18 ***	0.17 ***	0.04
	高卒	0.19 ***	0.35 ***	0.25 ***	0.14 ***	0.13 ***	0.01
就労状況ダミー	通勤時間90分以上	-0.03	0.07	-0.08	-0.07	0.01	-0.07
	週労働時間60時間以上	-0.14 ***	-0.16 ***	-0.12 ***	-0.09 **	-0.13 ***	-0.24 ***
	生活保護受給	0.07 **	0.35 ***	0.20 **	0.08	-0.10	-0.22 **
	会社経営者	0.16 ***	0.14	0.17 **	0.17 ***	0.28 ***	0.04
地域建物評価	地域の居住満足度	0.21 ***	0.21 ***	0.19 ***	0.21 ***	0.20 ***	0.22 ***
	建物の満足度	0.31 ***	0.25 ***	0.29 ***	0.31 ***	0.36 ***	0.36 ***
自己評価	私生活よりも仕事を優先する	-0.07 ***	-0.05 ***	-0.07 ***	-0.08 ***	-0.07 ***	-0.08 ***
	未来は明るい	0.53 ***	0.52 ***	0.53 ***	0.55 ***	0.53 ***	0.53 ***
	家族関係は良好だ	0.38 ***	0.29 ***	0.37 ***	0.40 ***	0.41 ***	0.41 ***
	仕事は順調だ	0.28 ***	0.27 ***	0.24 ***	0.30 ***	0.33 ***	0.21 ***
自己認知ダミー	リベラルな考え方をする	-0.19 ***	-0.22 ***	-0.18 ***	-0.16 ***	-0.25 ***	-0.13 ***
	人生でやりたいことがある	0.13 ***	0.09 ***	0.13 ***	0.12 ***	0.15 ***	0.15 ***
定数項		5.29 ***	5.36 ***	4.93 ***	5.01 ***	5.14 ***	5.45 ***

\*\*\*は1%水準で、\*\*は5%水準で、\*は10%水準で有意を示す

(3)主観的幸福度の重回帰分析

表 4 は主観的幸福度を目的変数にして、年齢毎に層別化して重回帰分析を行った結果である。

主観的幸福度は 10 段階評価であり、全体の平均は 6.51 で、年齢別に見ると 20 歳代:6.66、30 歳代:6.62 と高かったものが、40 歳代:6.33、50 歳代:6.33 と低下し、60 歳代で 6.79 と再び上昇する。

説明変数のうち地域の居住満足度・建物の満足度、自己評価の 4 項目は、そう思う:2、どちらかといえばそう思う:1、どちらでもない:0、どちらかといえばそうは思わない:-1、そうは思わない:-2 の 5 段階で得点化している。

偏回帰係数を見ると、20 歳代に比べて年齢が上昇すると幸福度は低下していくが、婚姻経験、既婚状態、

子供あり、孫ありは幸福度にプラスに働き、世帯年収と世帯金融資産の多さ、持ち家であることも幸福度を押し上げる。

学歴も高いほど幸福度押し上げ、地域の居住満足度や建物への満足度も幸福度を押し上げる。

自己認知では、未来は明るいと思うこと、家族関係が良好であること、仕事が順調であることも幸福度を押し上げるが、リベラルな考え方をすることは幸福度を押し下げる<sup>注5)</sup>。

人生でやりたいことがある場合は、幸福度を押し上げるが、偏回帰係数は 0.13 と比較的小さく、既婚(離婚・死別の経験はない):0.63、孫あり:0.15、家族関係は良好だ:0.38、仕事は順調だ:0.28、未来は明るい:0.53 と言った項目や、世帯年収 2000 万円～4999 万円:0.28、世帯金融資産 5000 万以上:0.20 といった項目に比べれば、幸福度に対する影響は比較的小さいと言える。

また、年齢別に層別化した結果を見ても、同様の傾向だが、子供ありの効果は 20 歳代、30 歳代で比較的大きいが、50 歳以上ではとうとう小さくなり、変わって孫の効果が大きくなること、学歴の効果は 60 歳代では有意ではない、といった興味深い違いもある。

## 5. 考察および結論と今後の課題

分析からは、「人生でやりたいこと」があるのは、全体の 24.5%程度に過ぎず、むしろやりたいことが無い方が多数派であり、性別、年齢、家族形態等による差はあまりないことが分かった。

一方で、やりたいことがあるのは、年収が高く、前向きな性格で、リベラルな考え方をしている会社経営者といった個人属性であることも分かった。

また、主観的幸福度は、20 歳代よりも 30-50 歳代で低くなり 60 歳代で 20 歳代と同程度に戻ること、女性のほうが、既婚のほうが、子供・孫がいるほうが、世帯年収・世帯金融資産が多いほうが、学歴が高い方が幸福度が高いことも分かった。

さらに未来は明るいと思い、家族関係が良好で、仕事が順調であれば幸福度が高くなり、リベラルな考え方をすると幸福度が下がるが、人生でやりたいことがあるのは、他の項目と比較しても幸福度への影響は比較的小さいことが分かった。

こうした結果から、大学での学生指導では、やりたいことを見つけることを強要すべきではないことはもちろん、必ずしもやりたいことを見つけることを推奨する必要もない可能性があることが示唆されている。

同時に就活指導・キャリア教育においては、やりたいことを仕事にする必要が必ずしもなく、やりたいかどうかとは関係なく仕事が順調だと感じれば、それで特段の問題ないこと、といったことも示唆されている。

さらに、やりたいこと無くとも、家族を作り、家族関係が良好で、仕事を順調にこなし、気に入った地域・建物に住み、未来は明るいと思って暮らすことで十分に幸福感を高められる、ということも教えるべきであろうことも示唆されている。

社会における企業等の組織マネジメントに対してもいくつかの示唆が得られている。

例えば、リクルートでは、Will-Can-Must シート<sup>注6)</sup>というものが「やりたいことを目標に結びつけるため、本人が実現したいこと(Will)」として運用されているが、これはリクルートという比較的特殊な人材要件の会社

では有効であっても、通常の会社では有効ではない可能性がある。それはそもそも個人にやりたいことがあることを前提とするのか、しないのか、という人材マネジメントのポリシーの違いでもあるからである。

また、多くの企業で中高年従業員に向けてセカンドキャリアの研修を行っており、そのなかで第二の人生でやりたいことを見つけることを推奨しているケースもあるようだが、年齢に関わらずやりたいことが無いのが多数派である以上、やりたいことを見つけるという目標設定が適切ではない可能性がある。

このように、組織・人材マネジメントにおいてやりたいことを重要な要素として考えることを再考する必要があることを強く示唆している。

同時に、組織・人材マネジメントにおいて、組織のパフォーマンスと効率を最大化することだけでなく、組織ができることには一定の限界があるにしても、個人個人の幸福度を高めることも考慮する必要があるだろう。

今後の課題としては、やりたいことと仕事と一致している場合と一致していない場合に、どのような違いがあるのか、職種や仕事内容によってその傾向に違いがあるのかを分析することがある。

## 参考文献

- 1) 株式会社リクルート(2021)「転職活動者の意識・動向調査(2021)調査結果」  
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000001069.000011414.html> (2022.8.25 最終閲覧)
- 2) リクルート進学総研(2019)「高校生価値意識調査」  
<https://souken.shingakunet.com/research/2009/07/post-3863.html> (2022.8.25 最終閲覧)
- 3) 石橋里美・林潔・内藤哲雄(2019)「大学生における「やりたいこと志向」が自己成長主導性及びキャリア探索に及ぼす影響」応用心理学研究 45 巻 1 号, pp.68-75
- 4) 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎(2010)『日本の幸福度』日本評論社
- 5) 宗健・新井優太(2018)「住まいが主観的幸福度に与える影響」都市住宅学会 2018 年学術講演会

## 補注

- 注1) 野口みな子氏は、「自分探し」という言葉が 1994 年頃から使われ始め今なお使われていること、就活での使われ方も変化していることを指摘している。  
<https://withnews.jp/article/f0190325001qq00000000000000000000W06910801qq000018851A>(2022.8.25 最終閲覧)
- 注2) 主観的幸福度の研究は日本では 200 年代に入ってから行われるようになったが、OECD も幸福度に関する白書を出すなど世界的に関心が高まっている。
- 注3) 2019 年から行っている調査であり 4 年間で 60 万人以上の回答を得ている。<https://www.eheya.net/sumicoco/>
- 注4) リベラルな考え方をするかどうかは、「社会にある所得などの格差は、機会が平等であったとしても本人の責任ではないので、できる限り解消されるべきである」という設問に対して yes と回答した場合をリベラルとしている。これは、早稲田大学の豊永郁子教授の、2019 年 5 月 16 日の朝日新聞に掲載された「政治季評 貧困は社会的不正義だと思いますか?—政治的立場、分かっテスト」を参考にしたものである。
- 注5) 大竹ら(2010)でも欧米の先行研究を引用する形で、「欧州では格差の増大は低所得層と政治的左派の幸福度を損なっている。一方、米国では左派のみが格差拡大から負の影響を受けている」と述べており、本研究の結果とも整合的である。
- 注6) リクルート社の Will-Can-Must シートについては、<https://www.recruit.co.jp/sustainability/people/career/> に詳しく記載されている。